

# Think the Earth Paper

シンク・ザ・アース・ペーパー

Think the Earth Paper vol.15

Winter-Spring 2014-2015



『続・百年の愚行』発行記念号

対談

山極寿一 × 小崎哲哉

京都大学総長／人類学・霊長類学者

『続・百年の愚行』編著者

21世紀の愚行を少しでも減らすための  
本・映画・ウェブサイト32

世界の至る所で、暴力が振るわれ、地球環境が痛めつけられ、  
経済格差が広がり、民主主義が危機に瀕している。  
これは「愚行」というより、  
むしろ「狂気」と呼ぶべき事態ではないだろうか。

——『続・百年の愚行』まえがきより

人間は本当に無関心でいられる動物なんです。  
すぐ近くで人が殺されていても、  
自分に関係なければ見なかったことにできる。  
そういう性質を持っているんです。

——山極寿一

かつてなかったくらいに成熟した  
資本主義の社会に生きてはいるけれども、  
知的なことへの関心がどんどん低下している。  
SNS隆盛の背景に、大きな溝が広がっている気がします。

——小崎哲哉

## 『続・百年の愚行』発行記念対談

## 山極寿一（京都大学総長／人類学・霊長類学者）×小崎哲哉（『続・百年の愚行』編著者）

21世紀に入ってから収まる気配がない戦争、差別、暴力、格差、核、環境破壊……。『続・百年の愚行』への寄稿家でもある人類学・霊長類学者と同書の編著者が、愚行とその背景にあるものについて語り合った。愚行を止める術は、はたしてあるのだろうか？

写真：石川奈都子

## ネット社会と「個人の喪失」

**小崎** 今回『百年の愚行』の続編を作ったきっかけのひとつに、最近の学生があまり本を読まないことへの危機感があるんです。2014年2月に大学生協が発表したデータによると、日本の大学生の1日の読書時間は平均26・9分。まったく本を読まない学生が40・5%。もしかすると他の媒体で知識は得ているのかもしれないけれど、本を読む機会や周りを見る余裕がないことが、愚行の遠因でもあるのかなという気がしたんです。

**山極** 今の若者たちは常にオンラインで他人とつながっている状態です。ということは、ひとりで考える時間がないんですよ。本を読むときは、自分ひとりで著者や本の中の世界と対面しながら、想像力をたくましくしていかなきゃいけない。そういう時間がないということは、人間にとって新しい事態だと思えます。これまで人間は、どこかで他人と切れてオフになる状態があった。そうして孤独になって、自分と向き合ってきたわけです。そ

ういう時間がなくなってしまったら、個人が自立できなくなる。もともと市民というのは自立した個人を形成することによって保たれてきたので、それができなくなると個人の実体そのものがなくなってしまふ。

**小崎** 昨年見たある展覧会で、ロバート・ウィルソンというアメリカ人舞台演出家が、フランスに亡命した中国人のノーベル賞受賞作家、高行健のポートレート（<sup>ガンジエン</sup>）を撮ったビデオ作品があったんです。デスマスクみたいな彼の顔に、フランス語で「孤独は自由の必要条件である」という文章が浮き出てくるんですが、国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）が世界人権宣言60周年を記念してオムニバス映画を作ったときにウィルソンがこの作品を出そうとしたら、OHCHRから「この一文は人権と相容れない」と断られたそうです（笑）。

**山極** 昔から人間には、自分が信ずる仲間で構成された集団に取り囲まれている感覚を求める心性があるんですよ。それを、視覚的な体験や視覚を代弁する感覚、あるいは五感すべてを使って、実感として持ってきたわけで

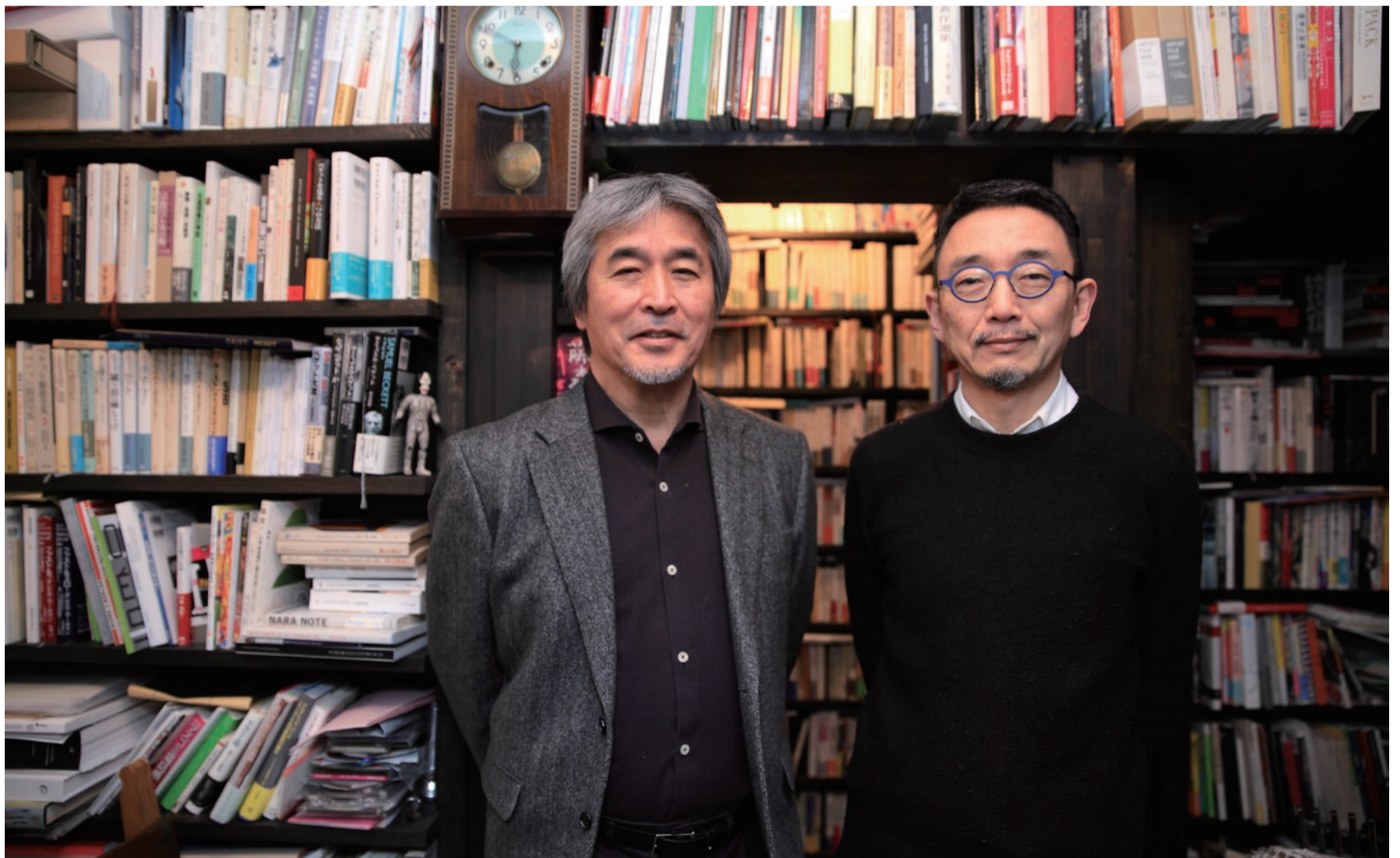
す。ところが今は、インターネットや携帯電話によって仮想空間の中でつながり合っているコミュニティなので、五感では実感できない。にもかかわらず、そのバーチャルなものが自分の核になっている。それは非常に怖いことです。なぜなら、人間にとって真実というものは、常に“見る”ことによって確かめられてきたから。人間にとって信用するに足る実体が、視覚によってすでに形成されなくなっているとしたら、我々が住んでいる世界をどうやって確かめたらいいのか。本というのは、まさに視覚体験を文字化して再現してくれるもの、あるいは読者と著者の共同作業による視覚体験の共有だと思えます。それが若い人たちにはしんどくなってきたということでしょうね。

**小崎** 本に限らず、山極さんは公共メディアの役割が失われつつあるとおっしゃっていますよね。2014年のガザ紛争の際に、僕もそれを実感しました。ネット上で議論が起こったんですが、イスラエル支持派とパレスチナ支持派の言うことがまったく噛み合わない。

両者の情報ソースが違って、そのソースの言っていることがバラバラだから。人間は自分を満足させてくれる言説しか読まない傾向があるし、それぞれ立場が異なるメディアの報道を根拠とする人たちがフェイスブックやツイッターで議論しても、噛み合わないのは当然でしょう。

**山極** みんなSNSなどでいろんな人と情報交換をし、対話をしているような気になってはいるけれど、他人の意見は誰も聞いていないんですよ。それは政治家を見ればよくわかります。国民に意見を聞いて、80%の人が反対だと言っても、取り上げませんからね。民主主義的な議論の場はもはや消えてしまったとしか言いようがない。それは、こういう文字化したネット上の無味乾燥な会話に慣れてしまった結果なんじゃないかと、僕は非常に危惧しています。

**小崎** SNSでつながる相手の数が肥大していくことも問題でしょうね。ダンバー数（※）について著書に書いていらっしゃいますが、人間の集団の規模としては150人くらいが適



山極寿一(左)小崎哲哉(右)

## 『続・百年の愚行』

2002年に発行し、今も版を重ねるロングセラー写真集『百年の愚行』の続編。「9.11」から「3.11」まで、21世紀の愚行を象徴する事件や事象の写真を約50点収録。愚行を繰り返さないための知恵として、現代を代表する5人の賢人たち、山極寿一、王力雄、イリヤ・トロヤノフ、ベネディクト・アンダーソン、ベルナル・スティグレル各氏からの寄稿文を掲載しています。制作資金の一部をクラウドファンディングサービス「READYFOR」を通じて募り、書籍で紹介した事件のその後をSNSやウェブサイトでも更新するなど、新しいスタイルの出版にも挑戦しています。

編著：小崎哲哉 +Think the Earth AD&デザイン：佐藤直樹+ASYL  
仕様：A5判/並製/232頁 発行：一般社団法人Think the Earth 発売：紀伊國屋書店

正だというデータが出ているわけですね。

**山極** 人間の脳に対する新皮質の割合は1,400ccから1,600ccで、この容量は150人くらいの仲間と付き合う規模だと言われています。実際人間は、言葉を作り上げる前に、150人くらいの集団を作り出しているんですね。言葉が発明されたのは数万年から数十万年前だと言われていますが、人間の脳が現代人の脳の大きさに達するのは40万年から60万年前ですから、脳の増大は言葉によってなされたわけではない。じゃあ言葉が何を付与したかといえば、情報操作能力を拡大しただけで、信頼できる人の数は増やしていないんですよ。今は付き合う人の数は増えたかもしれない。でもそれは、信頼して顔を覚えられるような間柄にはなっていないということなんです。

**小崎** 150人という数字は非常に納得がいくなと思いました。一方で、バーチャルの世界に時間を取られると、現実社会ではその150すら覚束ないのではないかなという気もします。今の若い人たちは旅行とか全然しませんからね。東大では学部生14,000人の内、2014年5月現在、海外に留学している学生は84人だそうです。わずか0.6%。

**山極** 新しい体験を積む必要がないと思っているんですね。“新しいこと”も昔と今とではまったく違う。昔は若者にとって新しいことというのは、上の世代が既に経験したことだったわけです。でも今は誰にとっても新しいことじゃなければ、それは新しいことではない。その新しいことにいちばんアクセスしやすいのはインターネットですからね。

**小崎** でも、それは幻想ですよ。

**山極** そう。つまり個人がないんですよ。自分にとって新しいことを求めるのではなく、誰にとっても新しいことを経験するのがうれしいわけですから。自分だけの新しいことを体験しながら自分を作っていくという願望が、もうなくなってしまった。それは強く感じます。

## 人間の本性と効率化の行く末

**小崎** 未来を悲観視する風潮が高まったのは、オウム真理教の事件などもあって1990年代からだと言われますが、僕は、第2次世界大戦が終わった1945年以降の東西冷戦時から

やまざわ・じゅいち

1952年、東京生まれ。人類学・霊長類学者。京都大学大学院理学研究科教授。ゴリラ研究の第一人者として、国際霊長類学会長も務めた。1978年よりルワンダ、コンゴ、ガボンなどアフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。他の類人猿やサルについても観察・研究を行い、その行動や生態をもとに初期人類の生活を類推。集団への帰属意識や互酬性など、人類に特有と思われる社会特徴の起源を追究している。「父という余分なもの——サルに探る文明の起源」(1997年)、「オトコの進化論——男らしさの起源を求めて」(2003年)、「ゴリラ」(2005年)、「暴力はどこからきたか——人間性の起源を探る」(2007年)、『人類進化論——霊長類学からの展開』(2008年)、『家族進化論』(2012年)、『「サル化」する人間社会』(2014年)など著書多数。2014年10月、京都大学総長に就任。

おざき・てつや

1955年、東京生まれ。『続・百年の愚行』編著者。和英バイリンガルのカルチャーウェブマガジン『REALTOKYO』及び『REALKYOTO』発行人兼編集長。1989年に文化情報誌『03 TOKYO Calling』(新潮社)の創刊に携わり、新潮社を退社後、インターネットワールドエキスポ1996日本テーマ館『センソリウム』、愛知万博テーマ普及誌『くくのち』、ウェブマガジン『先見日記』のエディトリアルディレクターを歴任。2000年に『REALTOKYO』を、2003年に現代アート雑誌『ART iT』を、2007年に『REALKYOTO』を創刊した。企画制作作品はほかにCD-ROMブック『デジタル歌舞伎エンサイクロペディア』、写真集『百年の愚行』など。京都造形芸術大学大学院客員研究員。あいちトリエンナーレ2013パフォーミングアーツ統括プロデューサーも務めた。

続いているんだと思います。『続・百年の愚行』の中に核兵器と原発の話を書いたんですが、この2つは裏腹な関係にあるわけですよ。これが作られたことによって、全人類は大きな心理的プレッシャーを受け続けてきて、その結果、いろいろな弊害を生み出した。世界の終わりを主題にした文学や映画や漫画がたくさん生み出されたし、厭世観も広がりました。今の若者がネットにこもる主因もそこにあるのではないかという気がします。

**山極** 僕は、第2次世界大戦後に起こった大きな誤解がもうひとつあると思っているんです。それは戦争自体に対する誤解です。第2次世界大戦後、レイモンド・ダートという化石人類学者が、人類はアウストラロピテクス・アフリカヌスの時代から骨を武器に互いを殺し合う行為をしていたと発表し、それをロバート・アードレイというアメリカの劇作家が『アフリカ創世記』に記したことにより、戦争は人間の本性なのだという思想が一気に流布しました。それは日本のような敗戦国では生まれぬ思想で、核を使って多くの人を殺戮してしまった罪悪感を軽減するために、戦勝国にはこういう思想が必要だったわけです。後にそれは綿密な調査によって先史人類学からも霊長類学からも否定されましたが、人間は狩猟によって攻撃性を高め、その武器を人間に向けることによって戦争を始めたというこの説には、2つの誤解があった。まず、狩猟によって攻撃性が高まることはないんです。そしてもうひとつは、狩猟と人間同士の戦いはまったく別物だということ。それは現代の狩猟採集民が証明しています。彼らは獲物を分け合うし、狩猟に使う武器を人に向けたりはしない。むしろ平和を好む、争いを嫌う人たちです。狩猟のために群れを作る霊長類はいないんですよ。だから、人間が狩猟によって社会を発達させたわけではないんです。

**小崎** むしろ身を守るために群れる。

**山極** だから人間の社会性は、狩る側ではなく、狩られる側にいることによって発達してきたんです。狩猟をするようになり、そして農耕をするようになってから、おそらく集団間の戦争がはじまり、武器が改良されるようになった。それはつい最近の出来事であって、戦争が人間の本性だとか、戦争が人間の社会秩序を作ってきたとか、そんなことはとても



言えません。でも、それを政治家がいまだに利用している。バラク・オバマはノーベル平和賞の授賞式で「戦争は昔から人間とともにあった。戦争もときには正当化される」と言っています。あれほど核兵器の根絶に力を尽くすと言っていた人が、ですよ。

**小崎** その仮説を置いておかないと、自国民を戦争に駆り立てるためのロジックが成立しなくなってしまうから。結局、戦争や争いというのは、為政者が民衆に物語を吹き込んで煽るわけですよ。あいつらは化け物だとか、襲わなければ俺たちが襲われるとか。僕は言葉を生業としているので、こういうことを言うのは嫌なんです。言葉には二面性がありますね。愛の言葉と憎しみの言葉というのかな。この本の「差別・暴力」の項に書いていたんですが、ルワンダのジェノサイドのときにレイプされて妊娠させられた女性たちの写真集があって、それを見るとみんな本当に無表情なんです。彼女たちは信じられないほど酷い目に遭わされているんですが、そのときに思ったのは、僕が男だということもあるけれど、被害者の気持ちを自分は想像しきれない。むしろ我々は加害者のほうになりやすいんじゃないかと。状況が変わって「敵が来ている、あいつらを殺せ」と煽られ続けたら、簡単にそっちに転ぶんじゃないかと思ったんですよ。ホロコーストに関与したアドルフ・アイヒマンについて、ドイツ生まれのユダヤ系米国人政治哲学者のハンナ・アーレントが「非常に平凡な人間だった」と書いています。数百万もの人々を死に追いやる残忍な計画を練った男は、我々と変わらない普通の人間だ

ったと。我々は虐殺されたユダヤ人ではなく、アイヒマンに近いかもしれないんです。

**山極** ナチスは、まさに今の日本がやっている効率主義とエコを完璧に成し遂げようとした団体でもあるんですよ。藤原辰史さんの『ナチスのキッチン』は、ナチスがテイラー主義に基づいて、キッチンの合理化を進めたことを論じています。その結果として、ホロコーストのような残虐な行為が生まれた。でもそれをやっていた本人は、悪いことだと思っていたわけではなく、むしろ当たり前のことと受け止めていた可能性がある。それが人間の恐ろしいところですね。

**小崎** 600万人を、いかに効率的に集めて、いかに効率的に運んで、効率的に殺し、効率的に死体を処理するか。それに、現場のスタッフが非常に生真面目に取り組んでいた。

**山極** 日本も効率、効率と言い始めて、これは危険ですよ。このままだと今の仕事のほとんどは、10年後、20年後には機械に奪われてなくなっているでしょうね。

**小崎** この本を作った直接的なきっかけは、福島原発事故だったんです。原発は制御がいちばん楽で、事故が起らなければいちばんコストがかからない。そして、原発を推進している人たちの言葉を使って言えば、CO<sub>2</sub>を出さないクリーンなエネルギー。それを我々は使っていたんですね、効率という美名のもとに。実際にはそうでないことがもうわかっているのに、それにもかかわらずまだ続いているのはどうしてかなと思います。

**山極** それは、資本主義経済がその道をずっとひた走っているからです。人間には効率化に合わないことは沢山あるんですよ。先ほどのダンバー数150人というのも、効率化によって作られたわけじゃなく、むしろ逆で、時間をかけないとそういう人たちは作れない。信頼は時間と正比例するんです。その人のために自分の時間を捧げて、やっと信頼関係が作れる。親と子の関係がまさにそうです。子育てに効率というのは当てはまらないし、しかも子供が育ついちばん大きな活動時間は遊びですからね。時間を効率よく使っているのは決して遊ばないし、無駄に使ってこそ遊びになるんです。それを、効率化を旗印にして人間の時間を支配していったら、もはや人間ではなくなってしまう。(P5に続く)

※ダンバー数  
ヒトを含む霊長類が、互いを認知し合い、安定した集団を形成できる個体数の上限。イギリスの人類学者ロビン・ダンバーが提唱した、群れの構成数と霊長類の脳を占める新皮質には密接な相関関係があるという仮説に基づく。

# 『続・百年の愚行』を読み解くために—— 21世紀の愚行を少しでも減らすための 本・映画・ウェブサイト32

『続・百年の愚行』では、愚行をテーマとする書籍や映画、ウェブサイト約100点を巻末にリストアップしています。ここでは、そのリストからさらに32点を厳選し、書籍の章に沿って解説付きで紹介しています。書影の下にあるQRコードを使うと「紀伊國屋書店ブックスストア」や該当するウェブサイトへすぐアクセスできます。

選／文：小崎哲哉

**関連する本、ウェブサイト**



『百年の愚行』  
20世紀に人類が犯した様々な愚行の写真100点と、クロード・レヴィ=ストロース、池澤夏樹など5人の「賢人」のエッセイで構成。2002年の刊行以来、版を重ねています。



『百年の愚行』ウェブサイト  
書籍で取りあげた事件や事象の情報をアップデートするために特設ウェブサイトを作りました。ぜひアクセスしてみてください。  
[www.thinkearth.net/jp/idiocy/](http://www.thinkearth.net/jp/idiocy/)



## まえがき | 愚行と狂気の時代



**カート・ヴォネガット**  
『国のない男』  
(金原瑞人訳／NHK出版)  
ドレスデン空襲に材を取った『スローターハウス5』でデビューし、20世紀後半の米国を代表するひとりとなった小説家(1922～2007)の遺作エッセイ集。「優れた芸術家は炭坑のカナリアのように世界の危機を察知し、警鐘を鳴らす」と主張した人だけあって、洞察・明察・名言に満ちている。そのほとんどがユーモアに(往々にして相当にブラックなユーモアに)包まれているのがうれしい。正論は、笑いと一緒に述べたいし読みたい。



**ポール・ヴィリリオ**  
『アクシデント 事故と文明』  
(小林正巳訳／青土社)  
著者は現代の進歩崇拜を一貫して告発する思想家。ツェペリン飛行船の墜落や巨大客船タイタニックの沈没などを踏まえた「あらゆるテクノロジーの発明は必然的・不可避的に事故の発明でもある」という卓見は、スペースシャトル・チャレンジャー号の爆発、チェルノブイリ、スリーマイル島、福島原発事故などによって図らずも証立せられた。YouTube「事故の博物館」も併せてどうぞ。  
[https://www.youtube.com/watch?v=A\\_A4z7L8-0](https://www.youtube.com/watch?v=A_A4z7L8-0)



**ミハエル・エンデ**  
『モモ』  
(大島かおり訳／岩波少年文庫)  
町はずれにある円形劇場の廃墟に棲みつけた少女モモは、相手の話を注意深く聴くという能力を持っていた。それだけで、人々はとても幸せな気持ちになった。ところがある日、人々は儉約しているはずの時間がますます少なくなっていることに気がつく。モモが言うには、時間は「時間どろぼう」の灰色の男たちに盗まれているのだった！ 高度資本主義社会における速度と効率の追求が、いかに我々を不幸にしているかを指摘した名作寓話。



## 第1章 | 戦争・紛争



**ベネディクト・アンダーソン**  
『定本 想像の共同体 —— ナショナリズムの起源と流行 社会科学の冒険』  
(白石さや／白石隆訳／書籍工房早山)  
国民とはイメージとして心に描かれた政治的共同体であり、それは18世紀のヨーロッパにおいて、新聞と小説によって初めて成立させられた。そんなフィクションでしかないもののために、しかも実際には格差や不平等があるのに、なぜ人々は国家に忠誠を誓い、「敵」と戦って殺し、我が身を捧げてきたのか。日本を含む各国の歴史や現状を精査し、国民国家が空想の産物であることを立証した名作。近現代史の理解には欠かせない。



**ジャレッド・ダイヤモンド**  
『銃・病原体・鉄』(上)(下)  
(倉骨彰訳／草思社)  
欧米社会がこれほど文明を発達させたのはなぜか？ 白人がかつてに優れていたからか？ 著者はこの問いに、はっきり「否」と答える。ユーラシア大陸は、地形、気候に恵まれ、食べられる植物が自生し、家畜にしやすい動物が息を吐いていた。理由はそこにしかない。と。そのおかげで豊かになった白人は、富を蓄え、他の大陸へ侵略し、原住民を滅ぼし、植民地支配を始める……。文明の起源や、地域による発達の違いを明らかにした著作。



**奥那覇 潤**  
『中国化する日本 —— 日中「文明の衝突」一千年史』  
(文藝春秋)  
「グローバル化は千年前にも実現されていた」と言われて驚く向きもあるかもしれない。だが、皇帝を除いて世襲制が撤廃され、科挙によって(男性であれば)官吏への道が開け、移動や職業選択の自由が実現された宋朝こそ、グローバル化の嚆矢だった。このような体制を目指す「中国化」と、正反対の「江戸化」がせめぎ合って進んできたのが日本の歴史、というのが著者の主張。さて、現代日本はどちらに振れているのでしょうか？



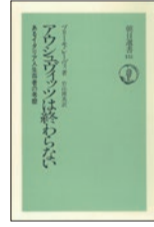
## 第2章 | 弾圧・迫害



**劉曉波**  
『天安門事件から「08憲章」へ』  
(劉燕子訳／藤原書店)  
1989年に中国で起こった天安門事件では、民主化を求める学生を中心とした市民デモ隊が北京中心部の天安門広場に集結。これを中国人民解放軍が武力で弾圧し、多数の死者が出た。文学者の著者は当局に抗議するが、数度にわたり投獄され、ノーベル平和賞を受賞しながらも、いまでも獄中にある。本書には、事件の犠牲者を悼む4編の詩のほか、多数の時事評論、そして民主化を求め、拘束のきっかけとなった「08憲章」全文を収録する。



**ハンナ・アレント**  
『エルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告』  
(大久保和郎訳／みすず書房)  
第2次世界大戦中、ユダヤ人を中心におよそ600万人が強制収容所に送られ、虐殺されたホロコースト。この「ユダヤ人問題の最終的解決」に関わり、輸送計画などを立案・実行したアドルフ・アイヒマンの裁判の記録。ユダヤ人哲学者のアレントは、アイヒマンを「悪魔・怪物」と位置付けたイスラエルの世論に抗して、冷静な観察と事実の調査に基づき、「自分は命令に従っただけ」という被告を小心者の役人に過ぎないと喝破した。



**フリーモ・レーヴィ**  
『アウシュヴィッツは終わらない あるイタリア人生存者の考察』  
(竹山博英訳／朝日選書)  
24歳のときにファシストに捕らえられ、強制収容所に送られながら奇跡的に生還した若者の手記。化学者であったためにガス室送りを免れたが、やはり収容所は「地獄の底」だった。信じてほしいほど過酷な日常が淡々と描かれるが、後年付け加えられた後書きを除いてナチスを糾弾するようなくだりはない。しかし、いや、だからこそ、圧倒的な絶望と虚無感が心に響く。著者はその後、高名な作家となったが1987年に死去。自殺説もある。



## 第3章 | 差別・暴力



**山極寿一**  
『暴力はどこからきたか —— 人間性の起源を探る』  
(NHK出版)  
映画『2001年宇宙の旅』の冒頭に、猿人が振りかざした骨が空中に舞い、それが宇宙船に変わる印象的なシーンがある。猿の道具が武器に変わる、つまり戦争の起源を猿に求めているわけだが、著者はこの見立てを一蹴。猿と戦争は別だ、霊長類はむしろ、食糧と交尾の相手をめぐる争いをいかに回避するかを模索し、社会性を発展させてきたと説く。長年ゴリラなどの参与観察を続けてきた研究者の主張だけに、非常に説得力がある。



**エリック・プライシュ**  
『ヘイトスピーチ —— 表現の自由はどこまで認められるか』  
(明戸隆浩ほか訳／明石書店)  
ヘイトスピーチ(差別言論)とヘイトクライム(差別犯罪)との違いは何か？ ヘイトスピーチの規制は言論の自由と矛盾しないか？ ある意味で対極的な、ヨーロッパ諸国と米国の歴史を丹念に追跡・比較。レイシズム規制と表現の自由を両立させるために、どのように考えてゆけばよいかを示唆する。終章の「どの程度の自由をレイシストに与えるべきなのか」という題名に、この問題が文明社会の喫緊にして微妙な課題であることが窺える。



**シディ・ラルビ・シェルカウイ**  
**ダムアン・ジャレ**  
『BABEL (words)』  
(ロング・トレーラー版)  
(<http://vimeo.com/23168398/>)  
旧約聖書に記された「バベルの塔」の話に材を取って作られた、コンテンポラリーダンスの傑作。現代の作品らしく詞も多いが、英語のみならず数ヶ国語が交わされ、トルコ、インド、日本など、各地域の音楽が奏でられる。「文明の衝突」という表現が安易に用いられる時代。この作品でも些細なことから諷刺が生じようになるが、最後には言語と文化の多様性が称揚される。人間の共感能力が、まさに言語と身体によって表現されている。



## 第4章 | 貧困・格差



**添田唾蟬坊**  
『添田唾蟬坊 —— 唾蟬坊流生記 人間の記録』  
(日本図書センター)  
1872(明治5)年生まれの大演歌師の自伝。「演歌」とはそもそも「演説」を「歌」にしたもので、要するに政治的なアジェンダを路上で歌ったものだ。章扉に引いた「金金節」は1925年に大流行したが、いまでもそのまま通用する内容。人間はいつの時代でも「カネ」に踊り踊らされる存在なのだろう。唾蟬坊はレコードを嫌って録音を残していない。「添田唾蟬坊・知識を演歌する」(立光学舎)など、土取利行のCDをぜひ聞いてほしい。



**開沼博**  
『漂白される社会』  
(ダイヤモンド社)  
ファーストフード店を「宿」として「移動キャバクラ」で生計を立てるホームレスギャル、シェアハウスを舞台とした貧困ビジネス、「中国エステのママ」の茨の道……。グローバル化とともに格差が拡大する一方の現代日本には、マスメディアなどではなかなか取り上げられない深い闇がある。気鋭の社会学者が、自らその間に飛び込んで書き上げた渾身のルポルタージュ。「あつてはならぬもの」が生まれ、不可視化された過程がよくわかる。



**トマ・ピケティ**  
『21世紀の資本』  
(山形浩生訳／みすず書房)  
過去200年以上に遡って欧米の税務統計を分析し、富の不均衡、すなわち所得格差が生まれる原因を明らかにした書物。歴史的に「資本収益率(r) > 経済成長率(g)」という不等式がほぼ成り立つが、それは富裕層への富の集中を意味する。しかもこの不公平は、世襲によって年々拡大してゆく。格差の拡大と移住による脱・節税を防ぐために、著者は富裕層へのグローバルな累進課税を提案。格差による歪みを是正する案として一考に値する。





## 第5章 メディア・情報



**エドワード・W・サイド**  
(大橋洋一訳／平凡社)

著者は「オリエンタリズム」の理論で知られたパレスチナ系米国人の思想家。知識人を、アウトサイダーであり、アマチュアであり、現状の攪乱者であると規定し、公衆に向けて、あるいは公衆になりかわって、思想や意見を表象=代弁せよと説く。意義申し立てを行う相手は、国粹的民族主義や階級意識や白人・男性優位主義など。いまや多くの人が知識人になりうる時代だが、そのためには、しかるべき言語能力と権力に抗する覚悟が要る。



**ウンベルト・エーコ+ジャン＝クロード・カリエール**  
『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』  
(工藤妙子訳／CCCメディアハウス)

小説『薔薇の名前』でも知られる記号論哲学者と、映画監督ルイス・ブニューエルや演出家ピーター・ブルックらとの協働で知られる脚本家。希代の愛書家2名による博覧強記の対談。「発明された時点で進化しきってしまった」書物を中心に、記憶術、物の真贋、映画、権力とメディア、核廃棄物処理問題、ボルノ文学、ネットの功罪など、話題は多岐にわたる。老境に達した知識人が、収集した稀覯本を互いに自慢するくだりが微笑ましい。



**松沢哲郎**  
『想像するちから』  
(岩波書店)

ゲノムは98・8%まで同じ。では、チンパンジーは人間とどこが同じで、何が違うのか? 「人間とは何か」を知るために天才チンパンジー「アイ」を育て、アフリカで幾度となく観察を行った著者は、子育てに注目する。チンパンジーは母親がひとり育てて。人間はみんなで育てる。両者とも母は見つめ合う。でもチンパンジーは夜泣きしない。人間は教える。チンパンジーは教えない……。京大豊長類研の所長が人間の「心」の在処を探る。



## 第6章 環境・エネルギー



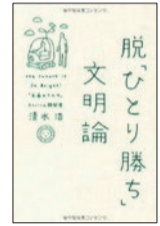
**エイモリー・B・ロビンズ+ロッキーマウンテン研究所**  
『新しい火の創造』  
(山藤泰訳／ダイヤモンド社)

化石燃料に代わる新しい「火」とは何か? 先駆的なシンク(&ドゥー)タンクの所長が、膨大なデータと豊富な事例で、世界に「脱・石油」を迫る。課題は6つ。自動車産業を転換させ、航空機や車の走行距離や重量を削減し、建物の効率を高め、エネルギーを節減し、再生可能エネルギー利用を進め、電力事業の運用モデルを改革すること。あらゆるデータが、事例が、説得力あるロジックが、原発はもう要らないということを証明している。



**スチュアート・ブランド**  
『地球の論点  
——現実的な環境主義者のマニフェスト』  
(仙名紀訳／英治出版)

1968年に創刊された伝説的カウンターカルチャー雑誌「ホール・アース・カタログ」の発行人兼編集長が著者。「古くからの友人で同僚」であるロビンズの主張に反対し、脱・石油のためには原発が必要だと主張したが、福島第一原発の事故でその主張は崩壊した(本人はいまだに原発を支持している。だが、「私は生涯、環境運動家だ」と述べるだけで地球温暖化の危険性についての認識は確か。都市問題についての議論もシャープだ。



**清水浩**  
『脱「ひとり勝ち」文明論』  
(ミシマ社)

環境研究者である著者によれば、地球上の陸地の1・5%にソーラーパネルを敷き詰めると、それによって作られる電力で、世界70億の人間すべてが現代のアメリカ人と同レベルの生活を送ることができる。1・5%というのは実は相当に広大な面積だが、実現すれば貧富の差は解消され、食料問題は解決し、戦争や紛争も激減するだろう。目先のことしか考えずに原発に頼るよりも、はるかに取り組み甲斐のある、夢のある課題ではないだろうか。



## 第7章 核・原発



**宮崎駿**  
『アニメージュコミックスワイド版  
風の谷のナウシカ』〈1〉～〈7〉  
(徳間書店)

舞台は「火の七日間」と呼ばれる最終戦争から千年後の未来。世界は猛毒の瘴気を放つ「腐海」と呼ばれる森に覆われようとしている。主人公ナウシカは辺境にある小国「風の谷」の族長の娘。腐海に棲む虫たちと心を通わせることができる不思議な少女だが、人々が穏やかに暮らす風の谷に戦火が迫ってきた……。世界的にヒットした映画とは異なり、意外にしてややほろ苦い結末が待っている。「フクシマ後」のいまこそ読み返したい。



**東浩紀**  
『思想地図β (vol. 4-1) チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』  
(ゲンロン)

1986年4月、ウクライナ北部のチェルノブイリにある原発で、人為的なミスによってメルトダウンが起こり、原子炉が爆発。世界中に放射性物質が飛散する史上最悪の原発事故となった。事故の25年後に出版された本書は、旅行ガイドの体裁を取っている。現地の人々への取材、多くの論考、鼎談、情報ソース紹介など盛り沢山。忘却に抗するための素晴らしい試み。後に、同様のコンセプトで『福島第一原発観光地化計画』も刊行された。



**スタンリー・クレイマー監督**  
『渚にて』  
(20世紀フォックス ホーム エンターテイメント)

1964年、核戦争によって北半球は壊滅。辛くも戦禍を逃れた米国の原子力潜水艦がメルボルンに入港する。自身家族を失った艦長ターズは、アル中だが魅力的な女性モイラと知り合うが、放射線による「最期の時」は南半球にも迫りつつあった……。冷戦期に製作・公開された映画だけあって、設定も結末も救いようがない。グレゴリー・ペック、エヴァ・ガードナー、フレッド・アステアらの名演技が世界の終わりをリアルに感じさせる。



## 終章 自己と他者への想像力



**岡崎京子**  
『ぼくたちは何だか  
すべて忘れてしまうね』  
(平凡社)

1980年代から90年代にかけて、『バーजन』『Pink』『東京ガールズブラボー』『リバーズ・エッジ』『ヘルタースケルター』などで一世を風靡した漫画家の短編物語集。素直でありながら皮肉が込められ、開かれていながら内省的で、純愛を感じさせながらもエロい、美しくも痛ましい言葉で綴られている。我々の他者との距離は、この時代から開き始めていたのかもしれない。著者は、1996年に不幸な交通事故に遭ってから筆を折っている。



**レイ・ブラッドベリ**  
『華氏451度』  
(伊藤典夫訳／ハヤカワ文庫)

華氏451度とは紙が燃え始める温度。書物が禁じられ、隠し持っていることが見つかったら焼却・処罰される世界を描いた近未来SFだ。近現代ではナチスによるものが有名だが、焚書は古来、ある文明が他の文明を滅ぼす際によく行われた。書物を受容する人々がディストピアから脱出し、個々人が本1冊を丸ごと暗記するという結末は感動的だが、逆に言えばこれほど暗澹たる未来はない。フランスワ・トリュフォーによって映画化もされている。



**ブルーノ・ラトゥール**  
『虚構の「近代」  
——科学人類学は警告する』  
(新評論)

原題は「私たちが近代人であったことなど一度もない」。近代以降、主体と客体、自然と社会は別のものとして扱われてきたが、実際にはそんな二分法には回収されない」と著者は述べる。事実、地球温暖化やAIDS蔓延などの諸問題は、いずれも自然科学と社会科学の双方を対象とすべきハイブリッド(混成物)ではないか。と。危機回避のために提案されるのは「モノの議会」の開催。原書の刊行は1991年だが、主題はいまも色褪せていない。



## 寄稿

『続・百年の愚行』に寄稿いただいた、現代を代表する5人の「賢人」に関する書籍やウェブサイトです。



**ベネディクト・アンダーソン**  
『ヤシガラ椀の外へ』  
(加藤剛訳／NTT出版)

名著『想像の共同体』の作者が、幼少期から現在までを振り返った自伝的な書。中国に生まれ、米国経由で両親の母国アイルランドに戻った著者が、いかにして東南アジア研究者を志し、世界的な知性になったか。その道筋を追うと、コスモポリタンな知識人の半生のみならず、学際研究ヘシフトする大学や、戦後の国際政治の変遷までもが見えてくる。40年来の信頼関係で結ばれた訳者による、違意の日本語も見事だ。日本語版オリジナル。



**山極寿一**  
『オトコの進化論  
——男らしさの起源を求めて』  
(筑摩書房)

生物としてのオスに、文化的な要素が加わって類人猿のオトコが生まれた。では、人間の男はオトコからどのように進化したのか? 食物の分配、遊びや性交渉、喧嘩と仲直りの方法、子育てと子殺しなど、様々な観点からサルや類人猿を観察・考察し、「力を抑制することが男として品格の高い、美しい行為だ」という結論に至る。同性愛は人間だけではない、相撲の仕切りはゴリラのドラミングに似ているなど、目から鱗が落ちる指摘も多数。



**ベルナルド・スティグラー**  
『技術と時間』〈1〉～〈3〉  
(石田英敏監修 西兼志訳／法政大学出版局)

銀行強盗罪で投獄された経験を持つ、異色の哲学者による技術論。現代は、人間性を開発=搾取る「ハイパー産業時代」であるという認識のもと、「技術が科学と不可分となり、効率性と目的が混同される」近現代が哲学的に批判される。フェリーニの『甘い生活』などを例に挙げつつ、写真や映画と、バイオテクノロジーをも含むデジタルテクノロジーが比較される第2巻が特に刺激的。我々は記憶の産業化に抗うことができるだろうか?



小崎 無償の愛なんて言いますが、資本主義は無償のものがあると困るからダメなんでしょうね。

山極 すべての価値が計算できて、なおかつ時間によって測られる。時間はコストですから、時間をかけないことが価値を生むというわけです。それはいいこともあるだろうけれど、例えば点数で人を評価する。能力を評価するならまだしも、全人的なものに使われるとしたら、これはとんでもないことです。でもそれが、様々なところで行われている。今は大学でもしきりに人材教育と言うけれど、要は企業がいろんなところで求める人材を作ろうということなんですよ。これこれこういう資質を持った人、そんなもの目標を作ったって育てられるわけがない。あらかじめ基礎教育や教養を与えることはできても、現場で能力を発揮するのは個人ですから、それをどう利用できるかは測れませんよ。

小崎 人材が画一化していくと、それこそ言葉によって簡単に煽られてしまうような人たちがばかりになるかもしれない。

山極 競争力を強化して、競争に勝てる人材を育成しましょうと。でも、同じような人材が育って競争していたら、面白いことなんか生まれるはずがない。同じような人を競争させても、ゴールはみんな一緒ですよ。考えることが一緒なんです。それではイノベーションは生まれにくいし、画一化していった先には徴兵制が待っているような気がするんですよ。兵隊は、画一化の権化のようなものですから。

小崎 最近では、無人ステルス機のようなドローンを飛ばしたりして、戦争の無人化がどんどん進んでいますよね。つまり、人を殺した実感がない。だから罪悪感もない。敵しか死なず、自国民には人的被害もない。

山極 もうゲームなんですよ。飛行機が人を殺傷しても、人の手で殺傷したわけじゃないから、映画を見ているのと一緒なんです。何の痛みも感じない。ナチスの時代より、もっと悪いかもしれない。

小崎 この本にも写真を収録していますが、イスラエルがガザを攻撃したとき、ミサイルが打ち込まれて噴煙が上がっているのを、イスラエル側から若い連中がスマートフォンで写真を撮っているんですよ。瓦礫の下にいる

人たちがどんな状態になっているのかということは、自分たちの想像力から排除している。

山極 人間は本当に無関心でいられる動物なんです。すぐ近くで人が殺されていても、自分に関係なければ見なかったことにできる。そういう性質を持っているんです。人間の共感能力は、類人猿と比べたら異常に向上したんですよ。でもそれは、基本的に150人の仲間に対してだけで、共同体の外の人間は排除してしまう可能性が高いですね。

### 愛ある言葉の力を信じる

小崎 この本を作りながらいろいろ考えたんですが、あらゆるものが全部絡み合っていますよね。戦争も、環境破壊も、原子力も、差別・暴力、情報・メディアも。じゃあ、なぜこうしたことが起きているのかと考えると、もしかすると対立というのは1つしかなくて、それは知性主義と反知性主義の対立じゃないかと思うんです。かつてなかったくらいに成熟した資本主義の社会に生きてはいるけれども、知的なことへの関心がどんどん低下している。それに対して知性主義が、そこに訴求できるだけの言葉を持っていない。そのために両者の乖離がどんどん広がってしまう。フェイスブックやツイッターは1つの例に過ぎなくて、その背景に実はものすごく大きな溝が広がっている気がします。

山極 その溝をどう埋めていくかは非常に大きな課題なんですよ。大学進学率を見ても若者の二極化が進んでいますし、社会に出て自立する資金もポストもなくて結婚できない若者男性がすごく増えている。そこに政府がちょっと餌を蒔けば、つまり自衛隊に入れば優遇しますよと言えば、若者はそっちに流れるでしょう。怖いことですよ。

小崎 先ほども言葉が情報を操作して戦争を引き起こすというお話がありましたが、僕は一方で、言葉に希望を持ちたいとも思っているんです。というのは、池澤夏樹さんが開戦直前のイラクへ行って、市内には緊張した雰囲気はほとんどなく、人懐っこく明るい人たちがとても美味しいものを作ってくれたと書いている。池澤さんはその人たちの顔と名前を覚えていて、「僕はこの人たちの頭上に絶対爆弾を落とせないと」言うんです。つまり、実際に会って、関わったことによって、池澤



2014年12月 京都にて

さんにとってその人たちが150人の中に入るか、入らないまでも近い存在になった。その本を読んで、僕はそういう人を想像できるような気がしたんです。それは言葉の持つもうひとつの力であって、だからこそ本を読まない若者や、自分の外に情報を求めていかない人たちに危機感を持っているんです。

山極 言葉はまだ人を感動させる力を持っていますからね。しかもそれは、視覚体験に還元される以上の何ものかを持っているわけですから、信じていいと思います。戦争という話でもうひとつ言えば、僕は戦争をもたらした原因は、定住化と言葉、そして死者を取り込んだ変なアイデンティティだと思っているんです。祖先が殺された、祖先が蹂躪された。だけど、それを恨みとして、我々が責任を負ったり、仕返しをしたりしなくてもいいはずですよ。我々自身が手を下していない、祖先がしたことに対して、なぜ責任と義務を負わなければいけないのか。それは人間が死者に対する変なアイデンティティを持ったせいなんです。これは人間しか持ち得ないものです。

小崎 過去の戦争で日本が中国や朝鮮半島などでひどいことをして、今の我々日本人はあまり意識していないけれども、自分の祖先が殺された中国や朝鮮、東南アジアの人たちは、日本に対してずっと恨みを抱いていますよね。

山極 それはすべて世界の問題なんです。池澤夏樹さんの例のように、日本の若者だって個人的にはたくさん中国や韓国に仲間を持っていて、交流しているんですよ。でも国と国の話になってくると、どうしても境界が引かれてしまう。そこにはありもしない国家というものがあるんだろうけれど、国家というのは幻想ですからね。インターネットをうまく使えば、僕は既存の国家に囚われないでコミュニティづくりができるんじゃないかと思うんです。敵も支配者も作らない、非常にまとまりがないけれど、自由闊達な付き合いがで

きる。そういうコミュニティを作っていけば、国家を乗り越えられると思います。

小崎 望みはそこですかね。今おっしゃったことは、この本に寄稿してくれたベネディクト・アンダーソンさんも『想像の共同体』に書いていて、まさに「想像の共同体」という一言で国家を表しています。

山極 アンダーソンは、国家を作ったのは公共圏を支えるマスコミだと言っていますよね。離れて暮らしていて実際には会話が成り立たない人たちに、マスコミが共通の認識を与える文化が生まれてから国家ができた。今はマスコミの機能自体が衰退してしまったからこそ、逆に国家が強くなってきているんですよ。マスコミが自由な言論を守りながらいろいろなことを暴き、コミュニティの信頼すべき意見をきちんと作ることをしていないから、国家の統制ばかりが我々に跳ね返ってきている。マスコミを立て直せば、まだましになるんじゃないかと思えますけど。

小崎 僕も賛成です。

山極 僕は京都大学を中心に、京都ディベートというのをやりたいと思っているんですよ。テーマを決めているいろんなレベルで議論をし、それを活字や映像にして世界に発信していく。聴衆もただ聞いているだけではなくて、面白ければ自由に参加し、それに対して賛否を投票するようにしたらどうか。人間の安全保障も見直しが必要な時期に来ていますし、題材はいくらでもありますからね。今の日本の政治にぶつかるすれすれのところでできればいいんじゃないかなと思っているんです。

小崎 素晴らしいですね。そういうテーマがきちんとディベートされて、その記録が残って、さらに翻訳されて誰でもネットでアクセスできるようになれば、人類全体の大きな財産になりますね。ぜひ実現して下さい。期待しています。

(構成：杉瀬由希／協力：斉藤雅子)

## ——もしかすると対立というのは1つしかないのかもしれない(小崎)

## ——その溝をどう埋めていくかは非常に大きな課題です(山極)

# Information

01

## AQUA SOCIAL FES!! みんなとだから、できること。

トヨタの低燃費ハイブリッドカー「AQUA」のプロモーション活動として2012年にスタートしたAQUA SOCIAL FES!!。全国47都道府県の「水」をテーマとした環境保全活動は3年間で344回開催、参加者は合計34,215人になりました。

Think the Earthは企画アドバイザーおよび北上川流域(岩手・宮城)、鶴見川流域(東京・神奈川)で行われたプログラムのサポートを担当し、上流から下流まで、地域の環境づくりに貢献してきました。北上川では若者を中心に育成してきた川の体験サポーター「アクアレンジャー」がのべ80人になり、鶴見川ではオオヨシキリという夏鳥が15年ぶりに戻ってくるというサプライズもありました。時間をかけて取り組んできたからこそ嬉しい成果です。

企業と社会と個人がつながり、「みんなとだから、できること。」を実感した3年間。ご参加いただいたみなさま、本当にありがとうございました！2015年の開催に向けて着々と準備を進めています。今年もたくさんの笑顔に出会えることを楽しみにしています。(関根茉帆)

<http://aquafes.jp>



上) 北上川中流域でスワンプ(湿地)づくりに挑戦！ 下) 鶴見川で外来種アレチウリを退治！在来のオギを移植 (写真提供:AQUA SOCIAL FES!!事務局)

02

## 再生可能エネルギー教育プログラム 「グリーンパワースクール」

経済産業省資源エネルギー庁が進める再生可能エネルギー普及促進事業、グリーンパワープロジェクトの一環で再生可能エネルギー教育の普及活動を行っています。昨年度も好評だった、書籍「グリーンパワーブック」を学校に寄贈するプログラムの他、企業とのコラボ授業の実施、書籍のダイジェスト版となるフリーペーパーを全国のイベント会場で10万部以上配布することもできました。また、再生可能エネルギー教育に取り組む先生や親子を応援するためのウェブサイトも立ち上げました。学校や家庭で使ってもらえる映像コンテンツや写真・図版などの素材集、イベントや出張授業の情報、グリーンパワーブックを使った授業案などを提供しています。

さらに2014年12月に東京大学で行われた「グリーンパワー大学」にてグリーンパワー・ティーチャーズサミットを開催。京都教育大学の山下宏文教授をはじめ、全国から集まった先生たちが、参加者と一緒に再生可能エネルギーと地域をどう結びつけるか議論することもできました。活発な議論を見ていて、再生可能エネルギーについて語り合う場づくりが重要であることを実感した一日でした。(笹尾実和子)

<http://www.gpschool.net>



ウェブサイト「グリーンパワースクール」では再生可能エネルギー教育に活用できるお役立ち情報を発信中。ぜひ、ご利用ください！

03

## 都市「東京/TOKYO」の未来を考える 「地球合宿2014」



上) 気候変動と都市について熱心に語る脇岡靖明さん。下) 子どもたちが直径6mの地球ディスプレイを使って発表。会場は拍手喝采！

2014年秋、日本科学未来館と共催で「地球合宿2014」と題し、多角的な視点から地球の未来を考えるシリーズ・イベントを開催しました。テーマは、地球環境に大きな影響を与える「都市の変化」。なかでも注目するのは、未来に向けていち早く歩んでいる都市、「東京/TOKYO」です。

連続ワークショップ「TOKYO・データマッピング」では地図やデータを使い、「流域」「人口縮小」「気候変動」「生物多様性」をテーマに、岸由二氏、大野秀敏氏、脇岡靖明氏、五箇公一氏らを講師にお迎えして、参加者と一緒に東京の価値を再発見。「TOKYO・100人ディスカッション」では地球ディスプレイ Geo-Cosmos (ジオ・コスモス) の下で2日間にわたり東京の「魅力」と「リスク」についてディスカッションを行い、東京の未来像を共有しました。

東京はインフラも物流も整い、とても便利で「魅力」のある街ですが、人口も構造も巨大だからこそ高まる「リスク」も多く抱えています。地球環境が大きく変化し、少子高齢化が進む日本において、都市に生きる私たち自身が未来に残せることを考えていく、その第一歩となるイベントとなりました。(曾我直子)

<http://www.miraikan.jst.go.jp/event/1409011117226.html>

04

## モノがもたらす豊かな時間 「時間を楽しむマーケット」



自転車で旅を楽しむCYCLE TOURING オオマエジムさんが浅草から出張出張してくれました

2014年11月1日と2日、新宿パークタワーにおいて、リビング・デザインセンターが主催するイベント「Good Over 50's 都市型コンパクトライフのススメ展」の連動企画として、「時間を楽しむマーケット」の企画協力を行いました。モノがもたらす豊かな時間をテーマに、自分の手で暮らしを紡ぎだすこと、芸術や自然と親しむこと、誰かとの豊かなコミュニケーションを生み出すこと、イメージを刺激することなど、5つの視点でアイテムをセレクトしました。販売した商品はコーヒーマーカー、包丁などの調理器具、自転車、楽器、お香など。少子高齢化時代到来に向けて、50歳代からの将来をどのように暮らしていくかを、時間の使い方を見つめなおすモノを通じて提案しました。会場では、販売アイテムをより楽しむためのワークショップも実施。マイスターから学ぶ本格的なおいしいコーヒーの入れ方教室や、20年つ靴を育てる靴磨き教室、明治41年創業のかつ橋にある老舗調理道具店のスタッフによる包丁研ぎ教室なども開催されました。(谷口西歐)

[http://www.ozone.co.jp/event\\_seminar/event/detail/1746.html](http://www.ozone.co.jp/event_seminar/event/detail/1746.html)

05

## 「単位展」で『1秒の世界』が体験型の映像に！

あらゆるものづくりの過程において、長さを測るメートル、重さを量るグラム、時間を計る秒など、さまざまな単位が用いられています。この単位に注目することで、日常の見方を変え、新たな気づきと創造性をもたらす「単位展」が、東京ミッドタウンにあるデザイン展示施設、21\_21 DESIGN SIGHTで開催されます。展示会では子どもが1mになったことを祝う「1 Meter Party」という写真作品や、速度を映像で視覚化する作品、あるいは長さの基準となっているメートル原器のレプリカが展示されるなど、単位にまつわる多様な視点に触れるこ

とができます。その中で私たちが2003年に発刊した書籍『1秒の世界』を原作に、映像作家の岡崎智弘さんが体験型の映像作品を制作しました。岡崎さんはこだわりのあるコマ撮り映像を得意とするクリエイターで、テレビ番組「デザインあ」でも活躍しています。1秒の変化に着目することで世界のダイナミズムに触れようという想いで作った書籍のコンセプトが、岡崎さんの不思議な映像表現でどのように視覚化されるのか。ぜひ会場で体験してみてください。(上田社一)

<http://www.2121designsight.jp/program/measuring/>



製作中の一画面。映像の中の数字がコンピュータ制御で動きます。

21\_21 DESIGN SIGHT企画展  
「単位展—あれくらい それくらい どれくらい?」  
期間:2015年2月20日(金)—5月31日(日)  
会場:21\_21 DESIGN SIGHT  
(東京ミッドタウン・ガーデン内)

トーク「1秒の世界」  
開催日:2015年5月9日(土) 14:00-16:00  
出演:岡崎智弘+上田社一

# Think the Earth

[www.ThinktheEarth.net/jp](http://www.ThinktheEarth.net/jp)

一般社団法人Think the Earthは「エコロジーとエコノミーの共存」をテーマに2001年に発足したNPO(非営利団体)です。クリエイティブやコミュニケーションの力で、日常生活のなかで地球や世界との関わりについて考え、行動する、きっかけづくりを行っています。

環境や社会問題への無関心とあきらめの心こそ最大の課題ととらえ、ウェブサイトや書籍などで情報発信を行っているほか、企業やNPO、クリエイターとともに誰もが参加できるプロジェクトを開発・提供しています。

2014年度パートナー企業  
(2015.1.31現在 五十音順)

株式会社NTTデータ  
サラヤ株式会社  
株式会社ノーリツ  
株式会社堀場製作所

# NTT DATA

Global IT Innovator

本紙、およびウェブメディア[Think Daily]は、株式会社NTTデータのご協力により制作しています。Think Dailyでは、世界各地で注目の人や活動取材する「地球レポート」(年4回)や国内外のライターによる「地球ニュース」が好評掲載中です。

<http://www.thinktheearth.net/jp/thinkdaily/>

発行●一般社団法人Think the Earth 〒150-0034 東京都渋谷区代官山町9-10 co-lab代官山6R01

TEL 03-3464-5221 FAX 03-5459-2194 E-mail [tte-office@ThinktheEarth.net](mailto:tte-office@ThinktheEarth.net)

発行日●2015年2月

編集統括●上田社一 編集補佐●笹尾実和子 制作●曾我直子

デザイン●武田英志 阿知波花恵(hoop) 印刷●株式会社日精ビーアール

Think the Earth Paper 電子版

本紙のバックナンバーも下記ウェブサイトにて閲覧できます。

<http://www.thinktheearth.net/jp/ttepaper/>



何かを夢見る人のために。誰かを想う人のために。



NTTデータは世界中で、人を支えるソリューションをつくっています。

ショッピングサイトで、誰かにプレゼントを贈る人がいます。

大学や企業のシステムを使って、最先端の研究にチャレンジする人がいます。

病院や災害の現場で、データを駆使して誰かを助ける人がいます。

「データ」は、いつもそこにいる人々のためのもの。それは私たちの毎日をより豊かに変えていってくれるものだと、NTTデータは信じています。

**NTT DATA**  
Global IT Innovator

〈お問い合わせ先〉株式会社NTTデータ 広報部  
〒135-6033 東京都江東区豊洲3-3-3 豊洲センタービル <http://www.nttdata.com/jp/>